



地域がはぐくんだ、ふれあいのつながりを訪ねて

愛ランドまーい

人と人のつながりがより身近な地域には、途切れることのない人の輪があり、脈々と継がれる絆があります。共同体意識に根ざした独特の活動を展開する各字を訪ねました

アブシバレーのメインイベント

旧暦四月、農村地域では古くから、豊年祈願として田植えを終えたあとアブシ(あぜ道)の草を刈り、総出で田畑の害虫を駆除するアブシバレー(畦払い)が行なわれてきました。

集落の共同の精神を象徴したこの農事が、大宜味村字大保では子供の誕生祭として今に継がれています。

アブシバレーの当日、公民館では学事奨励会が催され、そのあとはメインイベントで区民ごぞつて「ハチウリー(初降り)・メーニゲ(前願い)」のヤーマーイ(家庭廻り)へ、ハチウリーとは子供が誕生したこと、メーニゲとは懐妊したことをいい、子供の健康と安産祈願を表します。



道スネー途中で、喜び合い踊りだす

夕方から三線と太鼓を先頭に道スネーへ繰り出し、子宝に恵まれた家々を訪ねて、カチャーシーで嘉例(カリ)をつけてにぎやかに。その際、訪れた家からは心づくしの「ごちそうが振る舞われ、「産し子繁盛」を祝いあいます。

区民に生まれて一番初めに受けるこの祝いは、区外の出身者も対象とされますが、ここ十年、生粋の大保っ子のヤーマーイは二軒にとどまっています。



子宝は、ムラの宝 安産と健康を祈願するヤーマーイ

大宜味村字大保のたいほアブシバレー行事

ハチウリーの家のヤーマーイ。誕生した子供を祝して、カチャーシーを踊り、訪れた家からはごちそうが振る舞われる。



空から見た大保集落



三線・太鼓を鳴らし、ヤーマーイへ出発

※ヤトクイ 屋取士族が開いた 塩田の地

塩屋湾の奥深く、大宜味村と東村の村境を源流とする大保川の河口。その南側の砂州に塩田を求め、およそ三百年前に那覇・泊の士族たちが移り住み、屋取集落として大保が誕生しました。

大正初期まで、この地では塩づくりが行なわれてきました。

組踊「花売りの縁」に登場する森川の子は、大保に塩づくりに来た屋取士族がモデルとされています。

字となったのは、大正十三年。その砂州も埋立地に姿を変えて、大保の今は三十八世帯、百三名が暮らすのどかな里の風情を漂う集落となっています。

高齢化が進む一方で、子宝がもつと授かるムラでありますように、ハチウリー・メーニゲのヤーマーイに子孫繁栄の願いが込められています。

※都市にいた士族が農村に移住して形成した集落



長寿の村 大宜味村



日本一長寿宣言の村

芭蕉の糸紡ぎ、日々の野菜づくり、近所のおつきあい。すこやかな暮らしで命の時間もゆったり流れます。平成5年に高々に長寿宣言。

もう一人の村民 「ぶながや」

平和を愛し、自然を愛する心優しい森の妖精。その棲家は、人間にとっても理想郷だと語りかけています。村制施行90周年を記念し、村のシンボルになりました。



喜如嘉の 伝統工芸、芭蕉布



戦後、沖縄各地の芭蕉布織りが廃れていくなか、喜如嘉の芭蕉布は苦しいながらも織りを守り、伝統工芸品として高い品質を極めてきました。

昭和49年「喜如嘉の芭蕉布保存会」が国指定の重要無形文化財に。

大宜味村概要

総面積のおよそ76%は森林。海岸にせり出した急傾斜地の奥の広い段丘面では、シークワーサーの栽培が行われています。



シークワーサー

長寿、芭蕉布、シークワーサー、ぶながやの里

沖縄本島北部ヤンバル。長寿世界の里で知られる大宜味村。いま、大宜味村を語ることは、時代のキーワードが重なりあいます。健康と長寿の仕組み、そして自然と文化に求める心豊かな要因も、日々淡々としたこの村の暮らしが物語ります。